

(議事録)

## 都市想像会議

### 第一回「マイノリティ×都市」

2015年6月1日(月)(18時30分～20時30分)

ヒカリエ 8F COURT

登壇者:



池山世津子  
渋谷区こども総合支援センター長



小林宗一郎  
NPO 法人モンキーマジック代表理事



杉山文野  
TOKYO RAINBOW  
PRIDE 共同代表/株式会社ニューキャンパス代表取締役



山崎亮  
コミュニティデザイナー  
/studio-L 代表

ファシリテーター:



左京泰明  
シブヤ大学学長



紫牟田伸子  
編集家/プロジェクトエディター/デザインプロデューサー



紫牟田：地域やまちの話をしていくと、これまでではどうしても建物の話に終始することが多かったのですが、ソフトの部分から話していかないといけない時代です。これからどんなものを建てたらいいのかということを実はハードをつくる人達もすごく悩んでいます。これから都市のあり方を開いていくには、さまざまな方々の意見をうかがいながら、これまでとは異なる視点から都市を見て、未来の都市を想像していくことが大切ではないでしょうか。

渋谷区では、この4月に「男女平等及び多様性を尊重する社会を推進する条例」(通称同性パートナーシップ条例：[https://www.city.shibuya.tokyo.jp/kusei/jorei/jorei/pdf/danjo\\_tayosei.pdf](https://www.city.shibuya.tokyo.jp/kusei/jorei/jorei/pdf/danjo_tayosei.pdf))が制定されました。そこには、「性別、人種、年齢、障がいの有無などによる差別されることなく、人が人として尊重され、誰もが自分の能力を生かして生き生きと生きることができる差別のない社会を実現することは、私達渋谷区民の共通の願いである」と明記されています。そこで今日はマイノリティという観点から、都市を考えてみたいと思います。

今日は、当事者の方、支援をされている方をお迎えしています。まずは、それぞれの活動をおうかがいし、それから議論に入りたいと思います。まず、それぞれの活動を紹介させていただきます。

## ■それぞれの活動

池山：私は現在、渋谷区の子ども総合支援センターというところで仕事をしております。44年くらい公務員をしていまして、そのうちの3/4は、福祉及び教育です。30年以上、社会的マイノリティと言われている生活困窮者、ホームレス、障がい者等への支援の仕事をしてきました。現在は、子ども、特に未就学児、0歳から学校に入るまでくらいの渋谷の子どもたち(約1万人)を対象にした支援を行っています。具体的には、虐待から障がいまで、特に最近、虐待が非常に話題になっております。自分のお子さんをうさぎのケージに入れて殺してしまったという事件もありました。川崎ではいじめを苦しめられて殺されてしまったということもありました。渋谷もそういうことが決してないまちではありません。昨年、「渋谷区子ども総合支援センター」が立ち上がり、渋谷の子どもたち

すべてを平等に支援してほしいという区の意向を受けまして、現在は、保育園や幼稚園、公立私立を問わず、巡回相談で回りながら、現場で困り感のあるお子さんとその家族の支援を行っているところです。実際にやってみると、子どもよりむしろ家族支援、親支援かな、と思いますね。

**小林:** NPO 法人モンキーマジックの代表をしています。NPO 法人モンキーマジックは、私と同じように目の見えない人を中心として、フリークライミング、最近ではボルダリングというと分かりやすいでしょうが、スポーツの普及を通じて障がいを持っている方の自立の支援や社会性の向上をテーマに活動しており、今年で10年目を迎えます。



ハートネット TV ブレイクスルー フリークライマー 小林幸一郎

<https://www.youtube.com/watch?v=Kk4LbonP3uM>

私は今47歳ですが、16歳の時にフリークライミングというスポーツに出会いました。28歳の時に進行性の目の病気にかかり、だんだん目が見えなくなってきました。現在では、上のほうに明るい電気がついているのはわかるんですが、皆さんがシーンとして聞いていらっしやると、私はここに人はいるかどうかもわからないくらいです。目が見えていた頃は普通に車も運転していましたし、アウトドアの会社でアウトドアのツアーやスクールのガイドもしていましたので、病気に出会って自分の人生に迷っていた時期があって、それから今見えなくなってしまった世界があって、そういった変わっていく環境の中で生きてきました。こういった自分の今の状況を踏まえた上で、今回のマイノリティのテーマに少しご一緒できたら嬉しいなと思います。それから今日ここに聞きにいらしている皆さんの一人でも二人でも、クライミング、ボルダリングをやってみようかなと思ってくれたら嬉しいなと思っています。

**杉山:** 僕はトランスジェンダーで、杉山家の次女として生まれました。もうネタでしかないんですが、女子高生の頃はルーズソックスを履いて学校に通ってました。なんで今日も女装かよと思っていました。どうして女体の着ぐるみを着ているような感覚の毎日なんだろうかと辛く苦しい時期もあったんですが、最後はタイでおっぱいを切ってすっきり(笑)。たぶん、今日昔の僕の写真を見せずに、元女子だといわなければ、きっとその辺のお兄ちゃんだなという感じだと思うんです。今日は性同一障害とはなにかということよりも、目に見えないマイノリティという立場でお話させていただきます。

ちょうど先月、「東京レインボープライド」という LGBT(レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー)のプライドパレードがありました。日本は20年前からやっていますが、今年は過去最高 55,000 人の方にご来場いただきました。この写真は渋谷の明治通りをちょうど歩いているところですが、パレード1日だけではなく、ゴールデンウィークの約10日間で、全国でセクシャリティに関する大小あわせてちなみに約60本くらいのイベントをやりました。



同性パートナーシップ条例制定にあたっては、当事者としていろいろ関わらせていただきました。また、昨年5月に神宮前2丁目に「カラフルステーション」というものをつくりました。



海外、たとえばサンフランシスコやニューヨークに行くと「LGBT センター」というものがあります。LGBT の人たちのコミュニティスペースだったり、情報共有できる場なんですが、日本はまだなかったんです。ただ日本はまだ行政からの支援や寄付金で賄うのは難しいので、1階を「irodori」というレストラン、2階をコミュニティスペース、1、2階の壁を利用して、ギャラリー運営みたいなことをしながら、1棟全体をカラフルステーションと呼んで、多様性の発信基地みたいなものにしようということなんです。新宿2丁目じゃなくて、神宮前2丁目の「新2丁目計画」なんておもしろいんじゃないかという話で盛り上がってスタートさせました。ちなみに LGBT の子たちの雇用というのは、まだまだセクシャリティをオープンにして働ける場所が少ないので、こういった場所を運営することによって、そういう子たちの雇用にもなったらいいなという想いでやっています。「レインボーフラッグ」といって、性の多様性を表す虹色の旗を外に出している以外は、特に LGBT とうたっているわけではありません。なぜなら、セクシュアルマイノリティ＝新宿2丁目にいる夜の世界の人とかテレビに出ているバラエティの人とか、どこか自分とか少し遠い存在の人というイメージが多いので、いかに生活の中に溶け込むのかということが必要だと思っているので、ただおいしいご飯を食べてもらって、楽しい時間を過ごしてもらって、後からこっつてこういうコンセプトがあったんだねとか、後からそのスタッフさんでそうだったんだと気がついてもらえるほうが、より身近に感じてもらえるんじゃないかなということです。現在は他にも飲食店を2店舗、全部で3店舗経営する傍ら、全

国でセクシャリティに関する講演会を行っておりまして、学校や企業でもやらせてもらっています。

**山崎:** コミュニティデザインという仕事をやっています。元々植物を使って公園や庭などの空間をデザインしていくランドスケープデザイナーだったのですが、その後やっぱり庭や公園をつくるなら建築ができなくてはと思って建築設計事務所に入りました。でもそこでもっと人やコミュニティがそこに関わらないと寂しいよね、ということで一旦設計を辞めて、10年前に studio-L というコミュニティデザインの事務所を始めました。コミュニティデザインとは、地域にいる人たちが繋がって、地域の課題をひとつずつ解決していくプロセスをデザイナーとして応援するものです。横文字で言うと、「Community Empowerment By Design」みたいな感じです。コミュニティの力をつけていくことをデザインの側面からやっという仕事として今やっています。

モダンデザインの歴史は、産業革命頃のイギリスで「アーツ&クラフツ運動」から始まります。僕はその系譜の中、モダンデザインの末裔にいるみたいに思っていたんです。一方で、地域の方たちとつながって解決していこうよと思えば思うほど、社会福祉という分野がすごく近く感じられるようになってきました。社会福祉ではケースワークから始まり、グループワーク、コミュニティワークをやっていく。さらにひとつひとつに対応していくのが難しい場合の「地域包括ケア」ということも言われるようになってきていて、地域の人たちが皆で地域の多様性をどう担保させていくのかを考えなければならないということに触れて、これだったらコミュニティデザインが何かできることがあるかもしれないと思って調べ始めました。そうしたら社会福祉というのは、どうも昔は COS(コス)と呼ばれた「慈善組織協会」という運動と、地域に入って地域を良くしていく「セツルメント運動」というのがあるというのがわかってきた。さらに、その「慈善組織協会」の立ち上げ時には、ジョン・ラスキンが資金の2/3を出していた。「セツルメント運動」の基礎はトインビー・ホールという人だと言われるんですが、そのトインビーさんはジョン・ラスキンの弟子だったんです。ジョン・ラスキンとはモダンデザインのルーツであるアーツ&クラフツ運動における重要人物です。

話が長くなりましたが、つまりジョン・ラスキンからモダンデザインが生まれて、オシャレなカッコいいことが世の中を豊かにすると思ってやってきて、「いや、それだけじゃダメだよ、人に近づかなきゃね」と思っていたら、社会福祉がすごく近くなってきて、そのルーツを調べてみたら、ジョン・ラスキンに戻ったという話なんです。

なので、今年の4月から専門学校で社会福祉を学び始めました。そうしたら、社会福祉士及び介護福祉士法の社会福祉の目的に、先ほどの渋谷区の条例とほとんど同じ文章が書いてあったのでびっくりしました。ああいう社会を実現することが社会福祉の目的なんですよ。この条例の上の部分はほとんど同じ。最後の「区民共通の願いである」というところは、社会福祉士の活動の目的であると書いてあるんですよ。

## ■まちでの困り感

**紫牟田:** まず、杉山さんにおうかがいしたいのですが、杉山さんはご自身の性別に対してずっと居心地悪く感じていたそうですが、東京や渋谷、あるいはお生まれになった新宿というまちの中で、ご自身とまちの関係で思うことがあれば教えていただけますか。

**杉山:** 僕は実家が新宿・歌舞伎町で 60 年以上トンカツ屋をやっていますので、生まれも育ちも歌舞伎町なんですね。やっぱり歌舞伎町はいろいろな人がいるまちなんですよ。よくセクシャリティについてカミングアウトすると、親と揉めるとか親が受け入れてくれないとかね。確かに親と揉めた時期もあるんですが、とは言え自分の親も新宿で生まれ育っているので、他の地域よりは割と多様性ということに慣れ親しんでいた部分もあったと思うんですね。でも僕は2年ほどバックパッカーをしていて、海外をプラブラとずっとまわって、アジア、アフリカ、中南米、いろいろなところに行っただけですが、やはり場所によっては、セクシャリティを欠片も口に出したら殺されちゃうんじゃないかとかいうところもあれば、タイとかベトナムに行けば、当たり前のように生活の中に溶け込んでいるようなところも見ました。世界どこにいてもできている地域もあれば、できない地域もある。でき

ているところがあるというのであれば、絶対にできるはずだなと。そういうことは旅から学んだりとか、いろいろな人がいるということが当たり前なのに、なぜ違いをなかなか受け入れられないんだろうとか、やはり他者を受け入れるとか、違う人たちの存在をあまり身近に感じられないできたのかなとか、そんなことを考えたりしました。

**紫牟田**：おもしろいですね。新宿はごちゃごちゃした、そもそも多様性のある新宿生まれだからというのはあったと思うんですが、他の都市で居心地がいい場所がありますか？ タイではどうですか？

**杉山**：タイに行ってびっくりしたのは、見た目は中学生くらいの男の子だけれども、スカートを履いている子がお母さんと手をつないで買い物をしていたんですよ。日本ではこういう風景はなかなか見られない。でも一方で、日本人とハーフのトランスジェンダーの友人がいて、僕と同じように女子から男子に性別を変更したんですが、やっぱりそんなタイでも親には否定的に言われているのだそうです。だからいろいろな差はあるんだなとは思いますがね。

**紫牟田**：小林さんも東京生まれですが、小林さんにとって渋谷はどういうまちですか。

**小林**：私は東京の中央区新富町という、築地の隣にずっと住んでいました。父親は築地の魚河岸で働いてまして、叔母と祖母は芸者衆をしていて、子どもの頃から三味線の音を日常的に聞いて育ったような文化がありました。なので渋谷というより東京に対しての想いで言うと、今の**東京はつくられてきたまち**というイメージがあります。江戸の匂いが残っているような下町や、もともと東京の言葉話すような人たちは今すごく少なくなっていて、**つくられてきている東京だからこそ新しいもの、例えば今回のマイノリティなんていう考え方も新しく日本の中で出てきたものなのかな**というふうに思ってしまう。それこそ今使わなくなった言葉にメクラとかツンボとかキチガイとか、ある意味わかりやすいけれど、障がい者の分野では使えなくなった言葉もあって、昔はもっと身近にまちの中であって人々が受け入れていたことが、ある時期小綺麗なまちになってきたことで、いろいろなものが受け入れられなくなってきて、また今新しい次の世代、時期に移ってきているのかなと感じます。

**紫牟田**：池山さんはお母さんや子どもの支援をされていますが、渋谷という都市の中の子どもにはなにか違いがありますか。

**池山**：渋谷だから特別な親子関係に何かあるとかいう感触はあまりないですね。

そもそも私と左京さんは「男女平等及び多様性を尊重する社会を推進する条例」の検討委員だったんですね。当時の区長から委員になってほしいと言われた時、実は自分自身、男女差というものをあまり意識したことがなかったんです。渋谷区の職員でいる時に、いつも必ず「渋谷区初の女性なんとか」、例えば「初めての女性管理職」「初めての女性部長」「女性教育長」というのが付いてまわった。それがすごく嫌だったんです。女だからどうだってことはないだろうと。だからその検討委員会に入るのもすごく嫌だったので、男だからとか女だからとかいうことがないのだとすれば、男でも女でもないというところを検討しようと思ったんです。渋谷というのは多様性、つまりいろいろな人が集まって、**さまざまな個性が認められるまち**ではないかと。であれば、男だからとか女だからとかにこだわらないということを検討して進めていこうということで始まった検討委員会なんです。

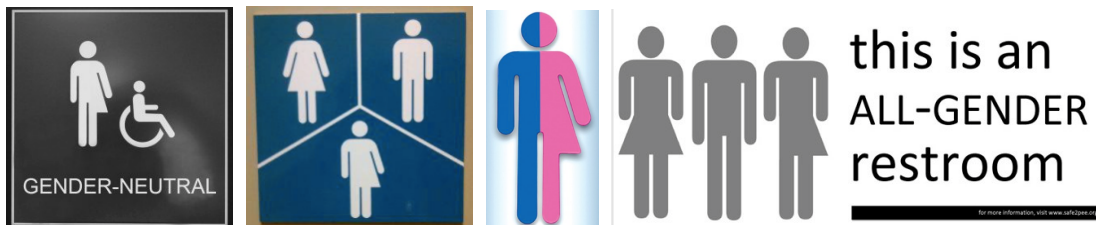
そこで杉山さんもゲストとして呼びました。そういう男女の間にいる人の困っていることを直接聞こうよということで呼びだし、男女平等で活動されている団体の方も呼びました。女性で困っていること、性的マイノリティで困っていることを初めて**生の声で直に聞く**ところからスタートして、では行政として何ができるか、何をしなくてはいけないかというところに辿り着いて、今回この条例になりました。今後この条例を進めていくな

かで、推進委員として杉山さんと私も入って、今後具体的なことを決めていくことになると思います。  
こう考えていくと、子どもの困り感というのもの、親が子育てで**困っていることはなんだろうということ**を、**やはり実際に飛び込んで知ってみたいとわからない**のではないかなと思ひまして、いま直接お子さんを見たり、お母さんたちからお話を聞いたりしています。

紫牟田：「困り感」という言葉が出ましたが、都市の中での「困り感」についていえば、杉山さんはどんなことがありますか。

杉山：簡単なところで言うとトイレですね。LGBTと言ってもL、G、B、Tそれぞれ課題は違いますが、特にトランスジェンダー（性同一性障がい）の立場から言うと、今でこそ見た目は疑われようのないくらい男に見えると思うんですが、性別の移行期と言ひまして、ボーイッシュな女の子なのか、かわいい男の子なのかどっちかな？というような時は、どっちのトイレに入っても、どっちの人にも注意されてしまう。まず女性用のトイレに入ると、「あんた、こっちじゃないわよ！」とおばちゃんに怒られてしまう。「これでも一応女子なんです」って、別に悪いことしている訳じゃないのにトイレの中で謝った回数は数知れず。かといって、男性用のトイレに入れるかという、例えば家族でご飯を食べに行つて、父が「うちの娘です」と紹介しているのに、父の友人と男性用トイレで鉢合わせするわけにはいかないしなあ、とか……。とにかく僕は、そこでは極力トイレには行かないようにしていました。トイレのような生理現象で毎日当たり前のようなことにもハードルがある。

海外では「ノージェンダー・レストルーム」「ジェンダーニュートラル・トイレ」なんていう表記があります。わざわざこんなことをしなくても良くなるのがいいんですけど、要は**目に見えないマイノリティがこういったかたちでその存在を少し目に見えるかたちにする**。今トイレにこの表記があるというのはうちのお店くらいだと思うんですけど、そういうものをわざとつけて「これ何？」っていうのも会話のきっかけにしたりとかにしたりしています。



あとは、見た目はこうですが、戸籍上はまだ女子なんです。性同一性障害特例法（性同一障害の性別の取扱いの特例に関する法律 <http://law.e-gov.go.jp/htmldata/H15/H15HO111.html>）というものがある、一定の条件を満たすと戸籍の変更ができるんですが、その条件のひとつに生殖器を取り除いているということがあります。僕はまだ子宮と卵巣を取っていないので、戸籍上は女子。そうすると個人情報も女子で登録されているので、選挙のハガキを持って行って受付をすると、「ご本人様ではないですね？」と必ず引っかかってしまう。僕はオープンにしているんで、実はこうなんですとすると、「そうですか、すいません」で終わるんですが、やはり隠されて生活されている方にとっては非常に苦痛で、そういった公的機関にはなかなか行きづらいつなががありますね。

紫牟田：では逆に、いままでより少し良くなったことはありますか。

杉山：認知度が上がったことですね。まだまだですけど、要は知つてしまえばなんてことはないということだと思ひます。いろいろな自治体課題がある中では、LGBTの課題はあまりお金をかけずに解決できるのではないかと思ひます。新しく施設をつくつたり段差をなくしたりと**ハードを変えなくても、みんなの認知が**

**変わるだけでだいぶ軽減される。**今まで「いない」ものとされてきましたが、「いない」のではなくて「言えない」というだけ。隣に座っている人が異性愛者かどうかは自己申告性なので、誰もわからない。その人にしかわからない。そこをいかに見える化していくかということですね。それで言うと先ほどお見せしたレインボーパレードやトイレの表記とか、とにかく「そういう人たちがいるんですよ」という目に見えるかたちで表に出すとか、すぐ近くにいるんだということをどういうふうに認知してもらっていくかということが課題かなと思っています。

**紫牟田:**では、小林さんの都市の「困り感」はどこにありますか。以前、渋谷は来たくないまちだとおっしゃっていましたが……。

**小林:**“渋谷”と言っても電車を乗り換えたり、目的のどこかに行くための“渋谷駅周辺”という意味での渋谷なんです。いま、劇的に渋谷のまちの建物とかが変わっていていますよね。視覚障がい者は覚えている自分の記憶を頼りに生活をしているので、以前はなんとか点字ブロックを頼って乗り換えもできたし、お店を目指して行っていたのが、あまりにもどんどん変わるので、私にとっては極力乗り換えたくない、駅も降りたくないと思ってしまうような場所になっているというのはありますね。

私たちは障がい者ということで不自由さを公に認められているというか、日常生活を送るのに大変なことがある人たちということで認められているので、そういう意味では杉山さんの世界とはまたちょっと違っています。杉山さんのお話を伺っているとご苦労が多いんだろうと思う反面、我々のことは“車椅子に乗っている”とか“白い杖を持っている”とか、いろいろな意味であまりにもわかりやすすぎて、多くの方が関わりたくない、「面倒くさい人が来ちゃったなあ」って感じになることが多いなと思ったりしますね。例えば、電車に乗った時に、白い杖を持った人が乗ってきて、近くに立ったら、席を譲ったほうがいいんだろうけれど、声をかけたくないとか……ちょっと**面倒くさい人たちだ**なというふう**に感じられている空気**はとてもよく感じます。

ただ、それがすべてかということとまた逆で、最近とても強く感じていることがひとつあるんです。それは今お話ししたように、どうか関わったらいいかかわからない、どう声を掛けたいかわからないというのが日本で、以前から「日本はハードは充実しているけれど、西洋の先進国に比べてソフトはまだまだ」みたいによく比較されていたと思うんですが、今日も渋谷駅で山手線を降りると、ふたりの方に「どちらに行かれるんですか?」「大丈夫ですか?」と声を掛けられました。多様性ということで学校教育や企業の研修などで障がい者とどう接するかを身につけ、**勇気を出して声を掛けられるようになった方が最近増えてきているということが実感としてある**んですよ。だから障がい者も外に出てきやすくなるし、出てきてもまちで安心して過ごせるようになっているのは、とても良い変化なんじゃないかなと思いますね。

**紫牟田:**池山さんはお母さんや子どもを支援されていて、ここまではよくできてきたけれども、もう少しこういうことが必要だとかいうようなことはありますか。

**池山:**山崎さんがまちづくりから福祉に辿り着いたというお話を聞きながら、なるほどなというところがありました。小林さんの言う障がい者に対してやさしい気持ちを持つというようなことは、実は学校教育だけではダメなんです。閉鎖された中で教員が教育を行う学校という場所ではなく、私はやはり**地域の力がすごく重要**だと思うんです。例えば、子育てひとつとってみても、「子育て支援」は保健所が子どもが生まれる前から後までやります。その後、さまざまな「ハザード支援」というものをやるんです。昔はこれほどひどい虐待や子育ての下手な親御さんたちは少なかったのに、なぜこんなに増えてきたのか。いろいろなところで語られますが、やはり地域の子育て力がすごく大切だと思います。私どもが「子どもの総合支援センター」で考えているのは、**家庭に代わるべきものとはなにか、子育ての再構築**と言うか、**その代わるべきものの支援策**みたいなも



のをつかっていかななくてはいけないかなということです。そこまで行政がやるのかどうかという議論ではなく、今実際に必要とされているものであれば、それは地域の力を巻き込んだかたちでやっていかざるを得ないんじゃないかと思うんです。

山崎： おっしゃる通りだと思います。先ほどケースワーク、グループワーク、コミュニティワークの話をしました。が、「コミュニティワーク」というのは「コミュニティ・オーガニゼーション」とも呼ばれます。わかりやすく言えば「**紐帯**」＝**結びつき**です。社会に結びつきがまだあった頃は、社会の中のいくつかの課題、虐待も含まれますが、課題があった時にそのつながりの中でなんとか解決して、どうしようもないものについては、お上に陳情しようという機能がありました。そのつながりがなくなってくると、ひとりずつが行政の対象になるんですね。国民・市民がわかっていなければいけないのは、ひとりひとりが生活すべてをフルサポートをしてくれと国や市や県や区に言うほど、消費税も所得税もそんなに納めていないという事実です。そんなに至れり尽くせりの社会保障をしてもらえる国ではないので、何人かで支え合いながら、どうしてもここは無理だと思うところを、行政とともに課題解決していくというのが基本である、というところをなんとかしなきゃいけない気がするんです。

ところが、たとえば家の前に落ち葉がたくさん落ちてると、掃除は行政の仕事だと言って道路課に電話をしてくる人がいるとよく聞きます。掃除の問題だけではなく、地域社会の中にある課題と思われることをすべて行政に依頼しに行くという構図はそう長く続きません。1億2700万人いた国とはもう違いますので、当然国民から集まってくる税金にしたって変わらざるを得ないわけです。その時、昔はよかったと言って昔に戻るわけにはいかないの、**新しい紐帯、新しいつながりというのは一体なんなのか、もっと端的に言うとそれをどう呼べばいいのか**、ですよ。 「コミュニティ」なのか「アソシエーション」なのか「トライブ」なのか「サークル」なのか「クラブ」なのか。誰かと繋がって一緒に何かをやっていこうというのが、町内会や自治会だけではもう力は持たないとなった時に、どんな種類のつながりで、それをどう呼んで、その人たちと共に生活課題を楽しく解決していくという場をつくっていくのか。今日この中に、マイノリティという言葉で表現されるような人たちもみんな一緒になりましょうという、「強制」ではなく、「**趣味が合うね**」とか「**同じノリだよ**」という人たちと一緒に**なっていれば**いいわけです。そこに多様性がきちんと担保されるようになってくると、地域ごとの課題解決は、もう少し肩肘張らずに進むような気がしますね。

## ■ 必要な空間

紫牟田： 小林さんはボルダリングをされていますが、視覚障がいを持っている方だけではなく、健常の方も一緒にやるんですか。

小林： 僕はこのスポーツにまだ目が見えていた16歳の頃に会ってまして、そのまま続けられています。最近2020年の東京パラリンピックもあって、「障がい者スポーツ」という言葉がマスコミにもよく出るようになりましたけれども、私たちがやっているボルダリングというスポーツは「障がい者スポーツ」ではなくて、「**障がい者も楽しめるスポーツ**」なんです。ですので、基本的には普通の人たちが普通にやっている場所に私たちも入り込んで、一緒に楽しんだり、一緒に悔しがったりしている。一緒に応援している中でこそ仲間が広がり、理解が広がる。そこにこそあるべき社会の姿があるんじゃないかと私たちは思っています。肩肘を張って難しい言葉を並べて理解がなんだとやる必要はなくて、**みんなで楽しんでガハハハってやっているところにこそ、必要な空間があるんじゃないのか**と常々感じるんですね。ボルダリングをやっている場所が、そのままちに広がっていったらいいのになって思っています。

紫牟田： 杉山さんは、「irodori」という場所をつくられて、実際来られる方の反応はどうですか。

杉山：つながりは僕の中でもキーワードです。マイノリティがいかに連帯するかという話で、分野は違ってもいかにお互いのマイノリティ性に共感して連帯して一緒にできる場所はやっていこうぜって、ものごとを動かしたいんですよ。

僕は**マイノリティは実はマジョリティ**だと思っています。どういうことかという、セクシュアルマイノリティに限らず、何かしらのマイノリティ性を持っている人のほうが大多数(マジョリティ)なんじゃないかということなんです。僕は性同一性障がいというわかりやすいカミングアウトがあるので、**結構いろいろなカミングアウト**を受けるんですよ。例えば、「まだ人には言っていないけれど、HIV なんです」ということから、「私は手に汗をかくのがコンプレックスなんだけど誰にも言えない」ということまで。そんなの気にしなければいいじゃん、と思ってもその人にとってはすごく大きなことなんです。手に汗をかくことがすごいコンプレックスで、デートの時に手をつながれちゃったらどうしよう、ってすごくドキドキして人に言えないんだと聞いた時に、やっぱり大きい小さいとかじゃなくて、その人にとってはこの悩みがすごく大きなことなんだと思いましたね。人に言えない悩みがあるという共通項でカミングアウトしてくれると、共感して話せるし、話すことでまた仲良くなったりしますね。

ただ、お店ですから、単純にご飯がおいしいから来たとか、普通にお酒を飲みに来てくださる。僕がやっているので当たり前のようにLGBTの人も多いので、たまたま隣の席に座って会話も盛り上がり仲良くなっていくようなことで広がっていきます。条例の時に署名を募った時にも、署名してくれた人の多くは、当事者というよりも、そのまわりの人なんです。当事者ではないけれど署名したとか、友達にも言っておいたからとか、そういうことで広がりが出てきてできるみたいな、そういうことがすごく大事だとも思っているし、それが**わかりやすい場所としては、飲食店というのはすごくいい**んです。「Irodori」はタイ料理屋なんですけど、タイはオカマもオナベもフレンドリーだからねっていうノリだけなんですけれど(笑)、とにかくおいしいご飯を出そうと。それ以上に言うことはないよと。おいしいご飯があれば、そんなカテゴリーを超えていろいろな人が集まる。おいしいご飯を食べるといのは、いろいろな人を誘うきっかけになりますしね。LGBT フレンドリーカフェがあるらしいよと言ってもなかなか食欲に結びつかないけど(笑)、おいしいものを食べたいというのは多くの人の共通項だから、おいしいものを食べにいこうよということがいい。その**おいしいものをつくっているのがトランスジェンダーの子なんだっていいこと**でいいと思ってるんです。そうやって**慣れ親しんで生活に浸透していくというのが大事**かなと思います。

そういう意味で「神宮前2丁目ファミリー」という横のつながりがだいぶできたところです。「ファミリー」と呼ぶのは、LGBT はいろいろな手法はあれど、子どもをつくるにはまだまだハードルがあるんですね。なので、家族をつくるという時に、一般社会は子どもを生んで、孫が生まれて、と縦に家族をつくっていくというイメージですが、LGBT は割と**横にファミリーを広げていくという意識**が一般的な社会より強い。自分たちより後に残す人が善くも悪くもないので、横の広がりにお金と時間を使うという傾向が強い。横のつながりで本当のファミリーのように仲良くなって、友達以上の関係というのは広がっていきやすい。それはちょっとおもしろいなと思っています。

紫牟田：横に広がっていくことがファミリーという概念になるのは重要ですね。縦の家族といえ、池山さんは家庭内暴力は連鎖しがちだというお話をされていましたね。

池山：被虐を受けた子どもと発達障がいの子どもの行動は、すごくよく似ているんです。あいち小児保健医療総合センター保健センターの杉山登志郎先生が、『子ども虐待という第四の発達障害』(学習研究社/2007)という本の中で、ふたつの行動は似ているので丁寧に分析をかけないと区別できない、とっています。私たち専門チームが見た例では、あるお子さんが集団の中でどうもひとりだけ飛び出してしまうという相談がありました。どうも母子関係がうまくいっていないからではないかと思われました。私と一緒に組んでいる先生が、「1日3分から5分でいいから抱きしめて、『〇〇ちゃん、ママ大好きだよ』という時間を必ずつくりなさい。その間に携帯が鳴ろうと何があろうと出てはいけませんよ」と助言したんですね。そうするとその子どもの行動が改まってきて集

団に馴染むようになってきた。親子関係がうまくいったんだなと思っていたら、1〜2ヶ月経つと元に戻ってしまった。改めてお母さんと私どもが面接すると、そのお母さんは、「〇〇ちゃん、大好きだよ」ということと、子どもが「ママが大好きなんだ」ということに耐えられなくなったんだというんです。子どもが自分のことを好きははずがないと言うんですね。なぜかと聞いたら、実は自分自身が親のことを大嫌いだった、自分が親から虐待を受けていた、だから親が大嫌いなんだ、だから子どもが親を好きははずがない、と……**世代間連鎖**なんです。その親から虐待を受けている親は子どもを好きになれない。あるいは子どもに手を出してしまう。**それをどこかで断ち切らなくてはいけない**んです。そのお母さんは打ち明けてくださったので、気持ちがすっきりしたと言っていました。こういうケースは非常に多いんです。ですので、背景にあるものは、非常に複雑なんですよ。

**紫牟田**：そういう連鎖を断ち切るには、横のつながりや自分をわかってもらえる世界の一員だと感じればある程度安心するものなんですか？

**杉山**：地域や近所で子どもを育てていた昔は、おじちゃんやおばちゃんが自分の子みたいに近所の子を叱る時って、たぶん子どもも逃げる場所があったと思うんです。家で嫌なことがあっても、近所のおじちゃんやおばちゃんの家に行ったりする。そういう行ったり来たりができて、家族というより地域で子育てしていた。**親としても何か嫌なことがあった時に相談できる人がいるとか、ちょっと子ども見ているとか預ける場所があるとか**。そうじゃないとなかなか自分だけで抱えて、相談する場所もなく、お互い親も子どもも逃げ場所がないというようなことが、少し窮屈なのかなと思いますね。

子どもを好きになれない親、虐待してしまう親、あるいは難しい障がいがある子どもを育てている親を**孤立させない、ひとりにしないというのが究極の支援**なんです。杉山さんが言ったように、地域には行けば話を聞いてもらえるというようなスポットが必要なんだろうなと。それは行政がやっても民間がやってもどこかやってもいいでしょうけれども、やはりそれを整備していかなければいけないかなと思っています。

**山崎**：さっき杉山さんがおっしゃった関係は、「紐帯」という言葉の分類の中ではよく「**斜めの関係**」と言われますね。親と子という垂直の関係ではなくて、横からチャチャを入れてくれたり、相談に乗ってくれたり、励ましてくれたり、叱ってくれたりする斜めの関係が、今ものすごくなくなってきているんですよ。親が子どもをなんとかしなきゃいけないと思っているし、叱らなきゃいけないとっていて、斜めから何か言われると、うちの子どもになんてことを言うんですかということになっているんだけど、本当はこの斜めの関係はすごく大事なんですが、つくろうと思ってもなかなかできるものでもない。まずお互いのある種の信頼関係を前提にしないと、いきなり斜めから何かを言っていくというのはなかなか難しい。信頼関係をどうつくっていくかことは、先ほどから話があるような、地域のつながりなのか、趣味のつながりなのか、何か**新しいかたちで横のつながりをつくっていくことによって、世代間に関しては横のつながりが斜めに見えていくということにもなる**と思います。

昔の人たちの知恵がすべて良いというつもりもないんですけれども、今話を聞いていて、例えば男性用と女性用のトイレはこんなに分けなきゃいけないのか、分けてさらに中間をつくって、さらにその中間をそれぞれつくって、5つくらいまく並べたりしなきゃいけないのか、少なくとも僕が小学生の頃まで男女は同じトイレを使っていたので、僕らが立ってオシッコしているところの横を女の子が通っていくようなことがあった。今は潔癖なまでに「覗いた／覗かれた」「下着を盗んだ／盗まれた」とものすごく敏感になりますよね。明治時代に入る少し前までは、通常混浴で、その後公衆衛生法等々により男女2つに分かれたと聞きましたが、潔癖なくらい女性専用車両をつくり、でもそうしたらトランスジェンダー専用車両だとかなんだとか、とにかく全部1車両ずつ、サラリーマン車両とか女子高生車両とかつくらなきゃいけないのか(笑)。

近代はどんどん細分化して分けて、いろいろなことを解決していこうとしてきましたが、21世紀はそれをどう統合させるかという時代だとよく言われますよね。今日の話聞いていても、誰の子であるということをそんなに重要

して縦につながりなきやいけないのか。かつてのように、養子をもっとポジティブに捉えて、子どもに恵まれない人と、子ども産みたいけれども今の収入ではふたりまでね、と思っている人が、3人でも4人でも産めるというふうにならないか。ポジティブに一番優秀な人間をうちにくれというような**養子の仕組みもあればいい**。困った子どもを引き離してこちらで面倒を見ているというネガティブなイメージをどう取り除くことができるのか。もちろん、危機回避の問題もあるけれども、一方でものすごく優秀な人間をあそこの跡継ぎに、みたいなことをフラットに語れるような仕組みに変わっていくと、もっと違う人口減少社会や少子化社会に貢献できるかもしれないと思いますね。



杉山:トラブルが起きたらいけないから仕組みをつくってきたつもりが、仕組みをつくりすぎてそれぞれに考える力がなくなってきてしまったというか、思考停止が起きているということもあるんじゃないかなと思いますね。よく「同性愛ってどう思う？」と聞いて「同性愛はいけない」という人に、「なぜいけないの？」と聞くと、「いけないものはいけないじゃん、気持ち悪い」。「じゃあなんで気持ち悪いの？」「だって気持ち悪いものは気持ち悪い」。でもそれは、その人の意見じゃないと思う。**世の中がそう思っているから、そう思ってしまったというか……**そういうことは結構多いのではないかなと思っています。制度というスタートで、じゃあなぜその制度なのかということを考えずに過ごしている。多様性なんて当たり前なんですけど、多様なものに対して自分で考えないと全部が制度でクリアできるわけがなくて、でも制度がないからとかいうところにまた頼ろうとすることに危機がある。やはりそれぞれが自分で考えて、それぞれが自分で対応して、またトラブルが起きた時に自分たちである程度は解決するように考えていけないのかなと思います。制度もちろん大事ですが、両輪でいかないと制度を求めるだけではいけない部分もあるのではないかなと……。

紫牟田:制度ではないとすると「良い仕掛け」みたいなものがあるといいのでしょうか。

杉山:セクシュアルマイノリティの人は鬱病の併発も多いと言われていまして、そうするとカウンセリングを受

けるとなるけれども、カウンセリングに行きやすい場所をつくるという以前の問題で、**普段の生活の場でちゃんと話せる場所があれば、カウンセリングなんて必要ない**と思うんです。「辛い」「苦しい」「助けて」「死にたい」というメールがたくさん来るんですが、会いきれないので、お店やっているから来てくれればと言うと、お店に暗い顔をして来た子もその辺の人達と勝手に話している間に元気になって、それで取り戻していく子たちもたくさんいる。

山崎:おいしいものも食べられるしね。

杉山:おいしいものを食べて、楽しいお酒も飲んで……僕のコミュニティの原点はグリーンバードというゴミ拾いだったんです。ゴミ拾いはお金も掛からないし、特に予約も必要なかったのも、ちょうど自分のカミングアウト本(『ダブルハピネス』)を出した時で、全国から会いたいと連絡が来たんですが、会いきれないから、「僕はここで掃除をしています」と言うと、北海道から沖縄から全国の当事者が会いにきてくれたんですよ。そうすると、本当はカウンセリングに行くような**ギリギリの子たちもとりあえず掃除に来て、みんなと話して、当たり前のようにこういうことを話しても大丈夫なんだって取り戻していく。そういう場所が増えていけば、制度とか施設を新しくつくってということとはもっと少なくすることができるんじゃないか**と。そういう力がコミュニティにはあると思っています。

山崎:改めてここで付け加えておくと、やはり**制度があるからこそできることも、もちろんありますから制度も大事**ですけれども、今の話を聞いて思ったのは、制度化が進むと、先ほどおっしゃったみたいに思考停止が売り出される。一度できた制度はなくならなくて、刷新されて、足りない制度をまたそこに加えることにずっと続いていく。だから**制度化とともに、脱制度化みたいなものをセットにして、常に何かを制度化するんだったら、消したほうがいい制度はなのかを確認できたらい**いですよね。常に、こっちをつくったんだから、これはなくしていいんじゃないかということを考えながらやっていかないと思考停止の人、あるいは分野をずっと増やしていく気がするので、そういうアセスメントがいるわけ。今の時代Facebookもあるんだし、ここの制度はいらなくない?みたいなことをみんなで話し合っただけで決めて、敢えて**戦略的に脱制度化**していくみたいなことと、そこまで賢く進められると何か違ってくるのかもしれないなと感じましたね。

紫牟田:小林さんはいまのお話についてどう思われますか。それと、以前お話をうかがったときに、「まちを楽しむには限界がある」というようなことをおっしゃっていましたよね。

小林:それは、「小林さんはまちをどんなふう楽しんでるんですか」と聞かれた時に、「私は今まちに出る中で、できないことがあまりにも多くなりました」とお答えしたんですよ。例えば暇つぶしが一番困ります。人と待ち合わせをしていて、1時間時間があっても、本屋で立ち読みもできないし、ウィンドウショッピングも楽しくないし、匂いがしてもどこにお店があるかわからないし、カフェひとつわからないし……。そういう意味でブラブラするのはできなくて、常にどこかに行くというのは、誰かに会う、何かを買う、映画を観るのに映画館に行くとかですね。さまざまな目的がないと、そのための心のゆとりというものが持たなくなっているというのはあります。その分、そこに代わってきているのが、先ほど来、子育ての話でも出ていましたが、**人と人の言葉だったり、つながりだったり、そういうことが我々にとっては、より重要**に感じています。

今日ここに来る時に、今回のテーマの都市とかを何となく考えていたんですけど、今僕らだったら何があったらうれしいかなと考えると、今お話ししたように、人と人のつながりがすごく欲しいんだとすると、**どんなまちが僕らにとってうれしいかなと思うと、まちが全部飲み屋になったらいいの**にって思ったんですよ(笑)。さっきの杉山さんの話はすごくわかりやすい。**飯を食って飲んだら楽しくて、心の中に持って**

**いるものが吐露できたりすることが起きる**わけですね。飲みに行ったら、普段そんなに喋らない人が、隣の知らないおじさんと話をし始めたりする。合コンもなんで飲み会の席でやるのかといえば、お酒が入ってみんな舌が滑り始めたりがあったりするわけです。そうすることでお互いが知り合えて、聞いてみようかな、どうかなっていうことも言葉にできたりということが、飲み屋で常に展開されているんじゃないのかなと思う。街全体がもっと言葉を交わせるようになるには、そんな**居酒屋みたいなまち**がだったらいいな、そのためには何が必要なのかなとかツラツラ考えながら来ました。特に目に見えないものが多い中で感じていることからするとそんなことを思っていました。

杉山:うちのお店は何を必ずやっているかという絶対毎日開けるんですよ。今日は僕はここにいますが、スタッフが開けている。いつ何時でも必ずあそこにいけば開いている、会える人がいる、いつもコミュニティがある。もし店が開いていないことがあったら、僕が倒れたと思ってくれと仲間にも言っているんです。土日祝日も関係なく、必ず絶対に開けて、いつでも会いにいける、**いつでも行ける場所があるという安心感**というのはあるんじゃないかなと思いましたね。

山崎:飲み屋には酒があったり、肴やつまみがあったりするじゃないですか。ボルダリングも壁があったりするじゃないですか。日本人は、対人コミュニケーションはそんなに得意ではない気がするんですよ。欧米人のように議論しようとか、Aに対して敢えてBをぶつけてみて、Cを・・・とか、ああいうのはドイツの経済学者あたりから入ってきたもので、僕らは元々得意としていない。議論しようとかディベートが得意な日本人とかは何かおかしい気がするの。そうではなくて、ここに水がある、マイクがある、机があるという、**あるものに対して、ふたりに関わっている時に関係性ができていることが多い**。酒がある、どんな酒を飲んでいるのか、つまみは美味しいのか、それに対して喋っているの、「あなた」に対して直接話しているわけではないという体をとりながら、この人は何が好きなのか、どういう性格なのかを探っているところがある気がするんですよ。

昔、民俗学の人と話した時に、水神様の話がおもしろかったんです。30~40年前くらいだと家にしか電話がない。地域のおじいちゃんおばあちゃんは河原で洗濯をしているんですって。川で洗濯をしていたら、家のほうから「お母さん、電話よー」と声がする。そうすると洗いものを途中にしてほっぴり出して若い奥さんが家に帰っていく。残されたお母さんたちは「だらしのないわねえ」という気持ちになるんですね。この人に対してあの人だらしのないわねって直接は言いにくい。そうすると目の前に水神様の石が置いてあるので、「まあまあ、水神様の前ではしたくない」と言って片付けるんだそうです。これは非常に巧みなコミュニケーションで、つまり本人と直接言い合うのは嫌なので、神様を置く。「神様の前なのにはしたなわね」というやり方が日本人にはすごくやりやすいコミュニケーションです。コミュニティデザインとかつながりをつくるという時に、あなたと私というように対峙させると結構面倒くさくて、そうではない**ものをここに置いてみんなでそれについて話してもいいし、話さなくてもいいし、みたいな状態をどうマネジメントしていくかということがつながりをつくっていく時に、非常に大切**なんです。まちが全部飲み屋とか、ボルダリングの壁があることによって、つながることが結構ありそうな気がしますね。

紫牟田:本当にその通りでなにかを間においてつながるというコミュニケーションのあり方は、現代のネットワークでもつくれるような気がしますね。

山崎:今、もの話をしているようだけれども、たぶん人の話をしている、その中のコンテンツ、プログラムの話をしていると思います。バリアフリーの概念の中で、**バリアには「物理的バリア」「心理的バリア」「社会的バリア」の3種類ある**と言われますよね。先ほど小林さんもおっしゃっていましたが、日本は物理的バリアに対しては急速になんとかしようとしてきたので、点字やラインだったりとかも一気に引いたし、段差を解消するためのバリアフリーもしなきゃいけないというところについては、ある程度はやれているという状態になって

きています。日本人はそこは結構得意なんだと思います。結構良い線いっていると言ってくれる方も多い。

ただ、心理的バリアと社会的バリアのほうですね。先ほど、杉山さんがおっしゃったみたいに、LGBT の場合は、お金が掛からずに解消する可能性が高いんだと。それは物理的バリアに対して何かやらなきゃいけないというよりむしろ、**心理的バリアの部分と社会的バリアの部分をどう改善させていくか**ということで、結構フリーになっていく分野が大きいということだったので、この渋谷の物理面をどうにかしていこうという話では全然なくて、最初に紫牟田さんが問題提起をされたように、まずソフトの部分から考えていって、どうしても必要なら、それに対応するハードをつくれればいいと。想像ってまさにそういう夢を語っておくことが大事なんじゃないかと。

**池山**：私は初めてシブヤ大学に参加させていただいたんですが、シブヤ大学は渋谷が誇るべき大学ですよ。他にないですよ。これも渋谷の大きな特色であって、逆にこういったシブヤ大学が、様々なものの中心になっていくのも渋谷の多様性ではないかなというふうにすごく思うんですよ。まさにバリアフリーの大学ですよ。こういう技法を使って、さまざまなことをいろいろな人に訴えていく。しかも講座の内容自体がいろいろバラエティじゃないですか。これも渋谷の誇るべき多様性だと思います。

**左京**：シブヤ大学が始まった頃には、池山さんは教育長のお仕事をされていて、もう長いお付き合いなんで、今の言葉もすごく感慨深いんですが、ひとつ問いかけたいのは、池山さんが地域の子育ての力が落ちてきているという時に、これからそれを取り戻していくというよりは、代わるべきものが今後生まれてくる必要があるんじゃないかというときに、その**代わりになるものをどう生み出していけばいいのか**ということなんです。その辺のアイデアがこの会議で出てくればいいなと思うんですが……。

**池山**：子育てについて言えば、「NP プログラム ( Nobody's Perfect Program ) 」 (<http://homepage3.nifty.com/NP-Japan/>) というのがあります。要するに完全な親なんていないよということで、地域ファシリテーターをつかって、その人のもとに子育て中のお母さんたちが集まって、それぞれ、「うちの子ここのよ」、「うちの子もそうよ、普通じゃないの」と。自分の子どもだけがそうだと思っていたら、実はお隣の子も他の子もそうだったとわかれば、安心感があるわけなんです。それから子育てが終わった直後の方「うちの子も実はこうだったのよ」というような仲間。昔は同学年の子どもを持つ親が近所にいたんですよ。あるいはおじいさん、おばあさんがいて、**そんなの当たり前だよとってくれる。それを意図的につくっていかなくてはならない時代**ではないのかなと思っています。誰がやるかは別です。行政がやるのか、あるいはシブヤ大学がやってくださってもいいわけです(笑)。子育て支援については、その辺が入り口かなと思っています。重篤な虐待が非常にクローズアップされがちなんですが、実は第一歩はこんなことで困っているんだけど、うちも同じなのよという、そこからスタートだとわたしは思っています。早い時期にそういった支援体制をつくっていきたいと思っています。

**紫牟田**：子どもたち同士も同じような言い合える環境があったほうがいいんですか。

**池山**：子どもは結構同じ年くらいの子は仲良く遊んだり、ケンカしたりするんですけど、親はそうはいかない。だから親のつながりがあることによって、子どもも〇〇ちゃんのお母さんとうちのお母さんが仲良しだっていうと結構安心するんですよ。子ども直接支援よりも私は親支援だと思っています。

**山崎**：孤立死の問題や認知症の問題であってもそうですけれども、**社会福祉、福祉介護という事象が**

**起きるより前が大事**ですよね。それに行き着くまでに人とつながりがあることによって、寿命が延びるころがあると研究結果が出たという本を読んだりして、少し可能性を感じたりしています。孤独は喫煙より健康に悪いそうですからね。禁煙よりは、むしろ友達をつくったほうがいいし、入院しても長生きできるわけじゃなくて、お見舞いに来てくれる人の数で余命が変わるらしいですし、つくり笑いでも寿命は2年延びるらしいですから、本気で笑ったらもっと延びますからね。

そういう意味では、日々の地域の中で、どういつながりがあって、どういつながりがある人生が歩めているかということが、子育ての分野にも影響してくるだろうし、高齢化の問題についても、そういう分野にそれ以前でどういう社会をつくっていくことが大事になっていくかとする、たぶんこれは社会福祉という問題から最初は入りましたが、**多分に社会教育の分野であって、生涯学習といってもいいかもしれないですが、そこを刷新させなきゃいけない。**

先ほどから池山さんがおっしゃっているような何か新しい仕組みやきっかけを、戦後できた社会教育のムーブメント、例えば公民館にしても社会教育施設である図書館、美術館、博物館、これもかなり形骸化していることは誰もがわかっていて、社会教育施設も公民館の中に入って、毎日日本舞踊だったり琴だったりしている人に部屋を貸している貸し館業務みたいになっている状態をどうやって地域の課題のエンパワーメントに使っていくか。公民館を3年間閉鎖して職員が仕事しなきゃいけないとなったら、商店街の空き店舗を借りるんですか、アーケードの下でやるんですか、公園を使うんですかと。館で待っていれば社会教育できているというような気になっているということが、今おっしゃったようなつながりを地域につくっていくところへ出て行かなくなって“待ち”の状態になっているので、「待ち」から「まち」へ態度を変換していかないと形骸化した施設ができて、制度化されていく。さっきの問題と一緒にですね。**一回つくった施設や制度を一旦壊すくらい新しい取り組みをしないと、かつてのコミュニティに代わる紐帯(つながり)を生み出すのは、結構難しいことだ**と思いますね。

**小林:**今のお話と少し路線が変わるかもしれないんですけど、今日の会議のテーマは「都市」「渋谷」となっているんですが、私は吉祥寺に住んでいて、今日は渋谷に来ている側なんですけれども、地域の住民、住民票があるかたたちがイメージできる渋谷と、いわゆる渋谷駅の周辺とか原宿駅、恵比寿に代表されるような、外から人が集まるような都市渋谷というイメージがかなりごちゃごちゃになってしまっていて、何をもち「渋谷」とか「都市」ということを話せばいいのかちょっと私にはわからなくなってしまっています。コミュニティとか子育てもそうですし、いろいろなコミュニティ、地域となると住民票がある渋谷区という行政単位の話と、多くの人イメージするこの賑わった大都会みたいなイメージとを整理するのが難しいなと思ったので、すみません、ちょっと発言させてもらったんですが……。

**紫牟田:**「渋谷」と聞いてどこをイメージするかは、それぞれ違うかもしれませんがね。私も小林さんと同じで、「渋谷」と聞くと「渋谷区」ではなく、駅周辺なんですよね。そのズレが結論をずらしつつあるのかもしれない。

**山崎:**俺も一緒。大阪から来たら、渋谷駅が一番乗り換えたくない駅ですもん。わからないんですよ、関西人にとって。

**紫牟田:**まちをどうとらえるかという話も非常に大きい問題です。ですが多様であるということ、どのエリアで考えるのかというような話でもないような気もするんです。

渋谷区のダイバーシティ条例は画期的だと思います。これが日本の中で、ものすごく突出した良い先例になるために、我々はもっと何かをしなくちゃいけないんだろうなと思い、今日はこのテーマで会議をさせていただきましたが、短時間で話し合えるものでもなく、やるべき方向に対してどういう沸石を打っていくのかということこれから真剣に話し合いたいと思います。民間と行政が何かをやっていかなくてはならない状態が来ている時



に、行政は民間と一緒に、こういうことをやれたらいいなということがあり、民間は、これをやるんだったらちょっとこういう力を貸してほしいなということが、やはりあるんじゃないかと思うんです。それをひとつひとつ提案していく、やっていくということができればいいんじゃないかなと思うんですよね。そのために何か知らなかったことを知っていく、学んでいくということはすごく大事だし、それをもとに自分の想像を広げていって、それを共有していくということが、良い街になっていくんだろうなというふうには思うんですよね。  
ここまでの話の中で、質問やご意見があれば挙手をお願いします。

**質問1:**池山さんにお聞きしたいんですが、子どもの遊び場や遊びについて、現代に目に見える変化というものは感じていらっしゃいますか。

**池山:**外で遊ぶスペースもないし、親もなかなか外に出さないとか、**遊び自体が変わっています**よね。外に遊び場がないので、家の中で遊ぶ。ゲームが流行しているのは渋谷の子どもたちも同じです。最近ひとつ大変なケースを抱えているんですが、実は親が外で遊ばせない。なぜかという、日に当てない。皮膚ガンになるから。このために重篤なクル病になる子が増えているという話を聞いています。子どもの遊びに親の思想が入っていくために健康を害したり、心の成長に阻害があったりとかいうのは、出てきていると思います。

**山崎:****遊び場も冒険ができない**ようになっているんですよね。行政の設計上では、50cm 以上の段差があるところには手すりを付けなくてはならないということになっているんです。1100mm、1m10cm の手すりを付けなくてはいけませんよ。机がほしい70cm、50cm といったらこれよりちょっと低いくらいですよ。これより段差があったら、ここから1m10cm の手すりがないとダメということなんですね。そんな牢屋に囲まれたようなところで遊ばなきゃいけないということになっているんだけれども、でも何かあった時に責任はどうするんだという話になると、やらなきゃいけないということになってしまう。さっきの制度の話と近いんですが、そこにプレイリーダーがひとり立っていることによって、回避できることがあるかもしれないし、子どもたちの冒険心みたいなものもどうやって育てていくのかということを考えていくと、もう一回脱制度化みたいなことを本当に必要な部分というのもやっていかなくてはいけないのかもしれないですね。

**質問2:**知的障がいにはさまざまな程度の方々がいらっしゃるので、生で接してみて初めてわかるということが非常に多いんですね。いかにして認知、理解するか、こちら側がどう受け止めていくか、というところが非常に重要だと思うんですけども、受け止めるためのメディアとかツールとか、我々は何を媒体にして理解していけばいいかということをお聞きしたいです。こういう理解してもらおう方法がいいとか、接点の持ち方をどう持っていったらいいかということのご意見を、みなさんにお伺いしたいなと思います。

**杉山:**知ってもらうための方法は僕もいつも難しいと思うんですけど、結局いつも「face to face」の関係ですね。顔を合わせて話すということが一番だと思っていて、どれだけテレビに出ていようが、LGBT の人は7.6%と言われている情報をメディアで目にしたりしますが、そうは言っても結局**顔を合わせて話すことほど、身になることはない**。みんなどこか遠い世界の人と思っているし、それに勝るものはないと思うんですよね。だからそれも両輪かなと。メディアやwebも使って、情報発信もしつつ、いかにリアルなコミュニケーションを取れる場所を、それこそイベントなのか飲食店なのか、さっき話で、まちが全部バーになればいいのにつけて聞いた時に、そのバーが全部テーマを持っていて、必ずバーは1店舗ずつテーマを持って。このお店は、働くお母さんたちのたまり場だったり、僕たちの LGBT だったり、ここは視覚障がいの方のお店だったりとか、そういう場所ができると、ご飯を食べにいったら、テーマを身近に感じられるとか、ご飯を食べに行こうという口実なんだけれどもそういう人たちに会えるとか、そういうことが平行してできたらおもしろいな、なんて考えました。

小林:週に1回、トランステーマの日があって、その店ごとにいろいろな人が別の店に顔を出したりしたら楽しいですね。

質問2:例えば代官山なら、オシャレでファッションがあってというイメージ付けがあって、渋谷であれば、トランスジェンダーの方も気楽に来られるまちですよとか、障がい者の方にやさしいまちですよとか、そういうところを認知してもらおうという中で、できるところからやっつけていけることが、今みなさんのお話を聞いているといういろいろあるんだなと思い、非常に勉強になりました。

紫牟田:ところで、障がい者にとって「やさしいまち」という言い方は、小林さんはどんな感じに思いますか。

小林:なにかまやかしのような気がしていて、障がい者にとって「やさしい」というのは、**お金を掛けて点字ブロックを敷きましたとか、段差がなくなりましたとか、そういうことが障がい者にとって「やさしい」というのを今の時代は言っているんじゃないかな**と思っています。でも実際は、さっきお話にでていたような、ハードだとかソフトだとか、みんなが知っている言葉もあるわけで、障がい者にとって「やさしい」は、未だに実現していないからそういう言葉がポロポロ聞こえてくるんじゃないでしょうか。

杉山:マイノリティという視点で思ったんですが、今日は「都市とマイノリティ」というテーマですが、**裏を返せば「都市とマジョリティ」という話**なんですよね。セクシュアルマイノリティは現在7.6%ですが、7.6%の課題なのか92.4%の課題なのかという視点の転換ですね。どういふふうにマイノリティを受け入れていきましようかと言っているけれども、実はそうではなくて、嫌な言い方かもしれないですが、マジョリティの人たちがマイノリティたちを受け入れていこうということに気がついたほうがいいですよ、ということかもしれません。最近僕たちは、僕らを受け入れられないというおじさんを見つけると、「そんなことを言っちゃってるおじさんを僕たちが受け入れていってあげないと、おじさんは時代に取り残されて可哀想だよ」ってことになっちゃってるんですよ(笑)。マイノリティに課題があるのではなくて、マジョリティの課題だと、**マジョリティの人たちの自分事にいかに転換させるかというスイッチをいろいろなところにつくること**なのかなと思います。

池山:やはり**正しく知る**ことではないかなと思うんです。私が福祉の仕事を始めた時には、まだ知的障がい者に関わっていて、知的障がいのお子さんがいると、そうではないお子さんを持った親御さんが、「近寄ってはいけません、うつるから」と言われていた時代があったんです。今はそんなことを言う人はいません。やはり正しく理解をしていくということが、一番必要なのではないかなと。じゃあどう正しく知らしめるか、知ってもらうかということもやはり同時に考えていかななくては行けないかなと思っています。

小林:杉山さんの話を聞いて、「LGBT」ってすごく結束感があつていいなとちょっと思いました。なぜかと言うと、**日本全体で障がい者は今720万人いるんですが、視覚障がい者は、全体の中では一番マイノリティ**で、30万人ちょっとなんです。障がい者は、国や社会は障がい者をきちんと理解しない、支援しないとワーワー言うんですが、目の見えない人が耳の聞こえない人のことを理解する努力をしているかとか、車椅子の人のことを、知的障がいの人のことを理解する努力をしているんだろうか。それで自分たちのことを理解しないとなぜそんなに大きな声で言えるのかと私は理解できないんですね。**マイノリティと言うけれど、障がい者は、LGBT の人のことを同じマイノリティなんだからと理解しようと努力しているのか、やはり自分たちの側もそういう努力が必要**だと思いますし、それがあって初めて、いま杉山さんが言っていた、そうではない大部分の一般社会の人たちにどうなんだろうという投げかけもできるのかなと思います。双方歩み寄りの努力があつてこそ、先ほど来言葉に出ていた「コミュニティ」とか「社会」とか、そういうところになってくるんじゃないのかなと感じたりしています。

杉山:歩み寄りというのは、まさにそうだと思います。LGBT という言葉は、当事者の中では賛否両論ある言葉なのですが、すごく功績は高い。批判する人は、権利の主張である L、G、B と、疾患である T を一緒に語らないでくれと言ったりします。以前は、L は L、G は G、T は T とコミュニティも分かれていてそれぞれ理解もなく、横のつながりもなかった時代もちろんあったんですね。それが1990年代から「LGBT」という言葉ができて、日本ではつい最近、2000年を越えたあたりから、いつの間にか一緒に活動する機会が増えてきて、数が大きくなってきたんです。僕自身もたった数年前までは、渋谷でやっているパレードは、同性愛の人たちのためのパレードだと思っていたくらいなんです。でもLGBTという言葉ができて、横のつながりができて、そうすると数が増えた分、発言力が増したりしてきて、それで動かしてきたことがたくさんあります。

歩み寄りは、僕の中でもずっとテーマです。僕が本を出した時、いかに隣にいる兄ちゃんみたいな立場で発言するかが大事だと考えていました。なぜかというと、性同一性障がいの人権を、と言った途端に当事者と非当事者に距離ができてしまう。でも一緒に飲んで楽しく過ごしていて、「お前、そうだったんだ」ってなれば、そこに溝はなくなる。それが大事なんじゃないかな。そうした時に当事者も、「なんでわかってくれないんだ」ではなく、お互い様。社会はわかってくれない、社会に理解がないから僕たちはこんなに大変なんだって言う僕たちは、どれだけ社会のことをわかっているか。わかってほしいという想いが強いと自分たちだけの主張だけで終わってしまったりするんです。いかに伝わりやすいかとか、どうやったら伝わりやすいかということをもう少し、当事者としても考えなければいけないし、非当事者としても、いかに知っていくかという努力も必要だと思う。

昔は知らなかったで済んだ時代もあったと思うんです。自分の親に「ごめんね、知らなかったのよ」と言われたときに、「そうだよ」と思ったんです。親たちの世代が、十分な情報量があったかと言えばやはり難しいけれど、今の時代は知らなかったでは済まされなくらいの情報量はあるので、知らなかったでは済まないということを踏まえて、いかに歩み寄るかというのは、キーワードだなと思います。

紫牟田:事実として受け止めるということですよ。知るということを考えて、学習するとか、小耳に挟むとか、ものすごくたくさんのバリエーションがあるじゃないですか。正しく知るための歩み寄りのやり方は、実は無数にあるんじゃないかなと思います。つまりコミュニケーションの方法を發明するということですよ。よくつながりと言うけれど、つながっているだけでは全然ダメで。杉山さんが言う、話したとか、小林さんが一緒に登っているとか、そういうコミュニケーションなんではないかという気がします。その機会をどれだけ持てるか、どれだけ増やすかですね。

小林:首都圏域というのは、すごくアドバンテージがあるなと私は感じています。それは公共交通機関の発達をもたらしているものであり、人口の多さであり、情報の豊かさです。我々であれば目に触れるということだと思っただけですね。ヨーロッパやアメリカに行くとすごく思うのは、車社会の弊害なんです。例えば障がい者の我々は、車社会だと点から点、自宅から目的地へ、つまり施設とか買い物とかに移動することになる。そうすると単独では移動できず、社会との接点もつながらなくなるし、言葉を発することも、自分から理解してもらおうという努力をする必要もなくなってしまふ。首都圏域の中でも渋谷はすごく尖ったまちですので、こういうまちが持っているアドバンテージを多いに引き出して、人と人とのつながりをもたらしえない手はないだろうと私は思います。

質問2:マジョリティが歩み寄りというキーワードが会話の中に出てきたんですが、歩み寄り方、接点の持ち方、みんなのできることに、どんなことがありますか。

杉山:LGBTに関して言えば、「ウェルカミングアウト」というのがいいんじゃないかな。「ウェルカム」なんですよ、

という「ウェルカム・カミングアウト」。「実は性同一性障がいなんです」という当事者からのカミングアウト。目に見えないから、言葉にしないとわからないんです。実は日常的になかなか言う機会もないんですが、逆に言えば、当事者以外の方がウェルカムなんですよと言って欲しい。例えば今日の帰り道に友達とかご家族とかに会った時に、一言でも「今日こんなイベントに参加して、杉山文野っていう人の話を聞いたんだよ」と肯定的に発言してもらおうと、きつとすぐ隣にいるであろう、まだカミングアウトできていない人が、この人になら言えるかもしれないというきっかけづくりになる。例えばテレビを見ていて、渋谷の条例のニュースが流れていたら、「こういうのっていいよね」と発言すれば、もしかしたらすぐ隣にいる、でも言えていない人が、この人になら言えるかもしれないと思える。そういうきっかけづくりは、お金もかからないし体力もいらないので……。これは LGBT の視点ですが、もしかしたらそれが違う分野にも言えることなのかなと思うんですけど、小林さんはどうでしょう？

小林:ご質問された方は、知的障がいの方と接点があるということでしたよね。

私たち視覚障がいと知的障がい、LGBT、その他のみなさんとどうつながりを持っていくのかというふうになると、放っておいても有機的なつながりができるかという、残念ながら私はできないと思うんです。ある程度意図的な仕掛けの場がないと起きていかないと思う。私自身は先ほどお話をさせていただいたように、**マイノリティと言われる側同士がつながって、自分たちなりの努力をしていかなと社会の中でのもっと大きな広がりには起きないと思うので、ある程度声を出せる人たちが、たまには他のところも行ってみようぜって、俺たちも何かできることがあるんじゃないのかっていうことを探しに、他のマイノリティのグループとのつながりをつくる仕掛けやきっかけをつくっていかないとけないんじゃないかなと思います。**

質問3:私はパートナー問題のカウンセラーをしているんですが、渋谷の条例ができた前後から、これまでの相談の中には数少なかったんですけども、最近になってちょこちょこ聞くようになったんです。「どうしたらいいの?どこに行ったらいいの?」と先日聞かれたんです。学校の先生に話したら、病院に行けと言われてたらしくて。本人もさすがに病院はないだろうと思ったらしくて……。どうしたらいいのでしょうか? 私自身はノーマルです。

杉山:それこそ僕のお店に来ていただいてもいいですし、今一緒にやっている「グッド・エイジング・エールズ」という LGBT のライフスタイルの提案をしていたり、あとは LGBT と企業ということで活動している「虹色ダイバーシティ」とか、「LGBT の家族と友人をつなぐ会」という、LGBT の当事者のご家族の方たちの集まりとか、僕はその LGBT の子どもたちのサポートをしていたりします。

自助グループみたいなものもたくさんありますし、インターネットでも書籍でも LGBT 入門的なものもたくさんあるので、そういう本を1冊読んでいただいたり、まずは自分と似ているような人に会って話をするのが一番だと思います。直接ご連絡いただければご紹介できることもあります。

あとは、一点。今「ノーマル」って言われましたけれど、「ノーマル」と言うと、そうじゃないのは「アブノーマル」なのかって言う人がいるので、たぶん「ストレート」という言い方がいいと思います。

質問3:そうなんです。ありがとうございます。

質問4:質問というよりこうなったらいいかなという意見ですが、僕の渋谷のイメージは、本町とか代々木とか下町のイメージなんです。渋谷はこんなに栄えているようでいて、意外と地方的な寂れたところもしっかりあって、その使い方を換えようよってやっています。全部が飲み屋になってもいいんですが、いろいろな人がいろいろな様に使えて、飲み屋にもなれるし、そこで遊ぶこともできるし、ワークショップもできるような場をつくることで、顔と顔がいつも会えるような場所がどんどん増えていくような、敷居の低さになっていけば自然と会えて、自然と交れて、怖いと思っていた人も怖くないんだ、普通なんだ、普通に楽しめたりするんだとわかるような場所が増

えていくといいなと思っています。そのために行政もそういう制度をつくって敷居を下げてくれたらいいな思っているんです。

**小林:** 飲み屋アイデアがかなり一人歩きしていますが(笑)、まちが飲み屋の雰囲気というか、飲み屋の空間がまちになったらいいなと思っていて、今おっしゃっていただいたまさにそこです。隣のおっさんと普通に話せる空気こそ、まさにまちにあったらいいな思いました。非常におっしゃる通りだと思います。

**紫牟田:** ありがとうございました。

では最後に一言ずつ、今日のこの時間の感想を言っていただきたいと思います。

**池山:** 最後に質問された方のおっしゃる通り、渋谷には二面性があります。ファッションのまち、若者の街・原宿、竹下通り、世界的に有名なスクランブル交差点。そういうようなまちと普通のまち。都心区が持っている二面性なのかなと思うんですが、私ども行政が相手にしているのは、ほとんどが普通の区民です。そういったところへの幸せを考えていく反面、世界的に有名になってしまったまちということも捉えていかなくてはいけないと思っています。普通の人たちが普通に幸せな暮らしができるまちづくりを進めていきたいなと思っています。

**杉山:** 今日はありがとうございました。テーマが壮大なので、1時間や1時間半で答えがでるようなものでもないと思いますし、でもこうやってざっくばらんに意見を出して、今みんながもやもやとしているものをひとつでもいから具体的なアクションにしたり、今日帰った時に一番近くの人にでもいいから、こんな話を聞いたよって言ってもらって一歩ずつ進んでいけたらいいのかなと思います。僕もいろいろなお話を聞かせてもらってもやもやとしているんですが、こういうことを継続して何かかたちにしていけたらなという第一歩としては、貴重な経験でした。

**山崎:** 普通という言葉の中に、それこそ虹色にいろいろな色があるということを今日は改めてよく感じました。マーケティングの用語に「アベレージマン」ってありますよね。40歳で家族がいて、こういう服装が好きで、年収はこれくらいでとかいう平均的な人を設定してターゲットを絞るんですが、そのアベレージマンという人はほとんどいないと言われてますよね。ターゲットにしているはずなのに存在しない。日本社会におけるアベレージマンを設定したとすれば間違いなくこの人はマイノリティですよ。そう考えた途端に逆転する。普通とか平均的と言われていたど真ん中の人たちはいないし、そこから右に1度ずれた人というのも相当少ない。そういう人たちの虹色がバーッとできあがって、プラスの極からマイナスの極まで、普通と言われるところがどこで切られるのか。時代によっても見る人によってもその見方が違ってきますよね。自分自身のマイノリティ部分がどこなのかを、深くまずは自分で知ることから始めて、他の人のマイノリティの部分は何だろうと考え始めると、それがあつた種の特徴に見えてくるような気がするんですね。社会福祉ではよく、「ストレングス」と言われますけれども、最初に小林さんの言葉の中に出てきた、「できないことというよりは、むしろ自分自身がどう生きていきたいか」、あるいは自分ができることでどう勝負していこうと思うのかという、このストレングスモデルと言われるような強みの部分をどう特徴として捉えていくのかという社会をつくっていくと、とてもワクワクするなあと思いました。今日はどうもありがとうございました。

**小林:** 今日はありがとうございました。勝手にいろいろお話させてもらったんですけど、私が今回ここにお声がけいただいたのは、本当に光栄だなと思っています。というのは、日本はハードが豊かになってきていて、ソフトが追いついていないという、これまでの言われ方が、変化してきているなとちょうど感じていた時で、日本も障がい者理解が進んできている時代が変わってきているなという実感がある今だからこそ、これからの未来の都市を考える時に、日本人がソフトについて、ソフトからものごとを考えるような時代になってきたと思えるタイム

ングだなど。だからこそういう場の意味があるなと思っています。やはりそういうお話がたくさん聞けて、本当にまさにいまからだなと思います。これから1年間をかけて、シブヤ大学がこれをどんなふうにまとめていくのか、とても楽しみです。がんばってください。ありがとうございました。

それから、NPO モンキーマジックでは、渋谷の宮益坂が上がったところにあるボルダリングのジムを金曜日の夜に貸切りまして、障がいのある人もない人も誰でも参加できる交流を目的としたクライミングのイベント「フライデーマジック」というものを始めました。6時から9時まで好きな時間に来て、好きな時間に帰ってもよくて、さらにその後は飲み会付き。私たちがやっているイベントは、飲み会の出席率が9割を超える驚異的なイベントでして(笑)、みんなで汗をかいて、いい大人がおもいきり悔しがって、おもいきり喜んで、おもいきり応援合って、さらにおいしいビールを飲み合っという感じのイベントです。そういう場所に、ひとつの理解のキーワードがあるんじゃないかなと思いますので、ご興味がある方はぜひ、無理矢理にでも参加していただきたいと思います。モンキーマジックのホームページ(<http://www.monkeymagic.or.jp/about>)もございますので、お待ちしております。

**左京:** いかにお互いが理解しあうかと話しがありました、僕が思い出したことをご紹介したいと思います。

「greenz」(<http://greenz.jp>)という媒体を運営している兼松佳宏さんと、以前こういったテーマについて話した時に、彼がポロツと言ったことがすごく印象深くて、彼だったか彼の身近な人だったか忘れてしまいましたが、少し体が弱いところがある、と。つまり、「僕もマイノリティなんだよね」ということをおっしゃっていました。仮に「マイノリティ」という言葉のある観点から見た時に、自分は社会の中でマイノリティに至る存在なんだということを自覚することが、ひょっとしたらそれ意外のある観点から見た時に、マイノリティだと言う人を理解することにつながる。マジョリティだと120%言い切れる人は、我々の中にどれだけいるだろうかよ。体のことだけではなくて、社会的な立場、経済環境、生い立ち……そういった中で、我々は必ずどこかしらマイノリティなんだと思うんです。それをまず知るようなアプローチを心がけてみるというのは、ひとついいのではないかと思います。

それから、『宇宙兄弟』という漫画の編集を編集したコルクという会社の佐渡島庸平さんが、「僕は思いやりを持つとういう言い方は、あまり好きではない。非常に押し付けがましくて、思いやりを持つという言葉の中に、強者が弱者に手を差し伸べるようなニュアンスがあるように感じる」と、『宇宙兄弟』の中で難病のALS(筋萎縮症側索硬化症)が登場しますが、ALS患者の置かれている感情や周囲のものごとが非常に克明に描写されている。実際に取材したのではなく、それは全部作者の想像力なんだと佐渡島さんは言うんですよ。頭の中で一生懸命「もし自分がそうだったら」ということを描いた。それがアーティストの本当のすごさなんだと佐渡島さんは言っていたと同時に、我々も想像力を持つことが大事なんだとおっしゃった。すごく心に残った言葉だったので、ご紹介しておきます。

今回の都市想像会議なんですが、こういった形式は初めてでいろいろ実験的でしたが、今日も含めてシブヤ大学の活動で最近すごく思うのは、それぞれの分野でいろいろな活動をされている方、あるいは渋谷区の中で実践的に仕事をされている池山さんのような方々と出会う機会に恵まれているということです。しかし一方で街づくりなどの現場に行くと、そういった方々が平場で座を囲んで、何かを議論をし合うところがあまりない。すごくもったいないと思うんですね。なので、このシブヤ大学の活動を引いて見た時に、さまざまな立場の方々がああるテーマのもとに一同に会し、平場で議論をするという場をつくってみたいなと思っています。

中でも今日は、池山さんが来てくださったことは非常に大きなことだなと思います。一般的に行政の方で、自分の名前を表に出しながら、こういった場に参加されるということは非常に勇気がいることだと思います。行政と関わる市民は必ずしも褒めてくれる市民ではなく、どちらかというとか何か言いたい市民が多いのが現状です。そういう市民の中に身をさらすということを池山さんが僕らを信頼して来てくださったというのは、僕としてはすごく嬉しいことですし、こういった話し合いの中身が今後の渋谷のまちづくりの中に何か具体的に生かされればよいなと思っています。

今日はひとつの課題に絞って何か答えを出そうということではなく、テーマを掲げながら、それを白紙のキャン

バスの上にみんなで思うがままに、スケッチを描いていくようなものだと思います。非常に豊かなスケッチになったんじゃないかなと思いました。これを1枚の描かれた木としたら、そこにどう挿し木をしていくとか、色を塗っていくとか、その先にどういう花が咲いていく、実が実っていくかということは、これからこの下絵を何度も我々で描いていきながら、浮かび上がってくる画をみんなで見ていければいいかなというふうに感じました。

**紫牟田**：今日のお話はとてもおもしろくて、まだまだ聞きたいことばかりですね。

私たちはこれからの未来のまちをつくっていくための想像力を羽ばたかせなければなりません。人の痛みを知るといっても想像力だと思うし、何かものをつくるということも想像力があってのものです。「そうぞう」というとクリエイション(創造)も大事ですが、イマジネーション(想像)の部分をもっともっと豊かにしないと今後イノベーティブなものごとは生まれないんだろうなと思っています。

そして会議に参加されたみなさんも私はこうしたい、とかこうしたらいいんじゃないという提案があれば記入していただきたいと思います。それぞれができることから、次に一歩進んでいけるようなことを、この会議を通じてまちへの提案にしたいと思います。今日はどうもありがとうございました。